

## 市原郡内の城址における里見一族との関係

里見氏は、本来は上野国の里見（現在の群馬県高崎市内）を本拠とした源氏の支流である新田氏の一族です。

里見氏が、南房総に本拠地を置くきっかけになったのが、鎌倉公方の足利氏と関東管領の上杉氏の間で争われた享徳の乱（1455年～1483年）と言われる。鎌倉公方側の里見氏と武田氏（甲斐武田氏と同族）は、上杉氏の勢力圏であった上総国と安房国に侵攻し、安房国に入ったのが里見義実（よしざね）とされ、南総里見八犬伝のモデルとなった人物です。但し、房総里見氏の中で歴史資料から実在が確認できるのは、15世紀末期から16世紀初期に活躍した里見義通（よしみち）からで、館山の稲村城を居城として安房国の戦国大名としての基盤を築いていったという。

ところが、16世紀前半の天文2年（1533年）に義通の子義豊と義通の弟の実堯（さねたか）、その子の義堯の間で「天文の内乱」と呼ばれる内紛が起き、義堯が相模國小田原城の後北条氏の助けを受けて義豊を打ち取るという形で決着した。そして家督を継いだ義堯のもと、里見氏は上総国まで勢力下に加え、君津市の久留鯉城に居城を置きました。義堯の子の義弘、その子の義頼は後北条氏との争いの中、富津の佐貫城南房総の岡本城に拠点を置き、上総の大部分と安房国を支配下に治め、最盛期を迎えた。特に、岡本城は東京湾に面して立地し鎌倉まで攻め入った里見水軍を指揮する「海城」としての機能も備えていた。豊臣秀吉が後北条氏を滅ぼした直後の天正19年（1591年）頃、義頼の子・義康は居城を館山城へ移し、東京湾に面した新井浦を港として城下町を建設、城下町は現在の館山市街地の原形になっている。義康の子の忠義で里見氏は改易となるが、里見氏の史跡は現在まで各地に残されている。



### 南総里見八犬伝

「南総里見八犬伝」は、「仁義礼智忠信孝悌」の玉を持つ八剣士が、房総の戦国大名・里見氏の危機を救う物語で滝沢馬琴が文化11年（1814年）から28年の歳月をかけて仕上げた大作です。この物語は、勧善懲悪という痛快な内容から、出版された江戸時代以来、時代を超えて多くの人々に親しまれてきました。

物語は結城の戦いに敗れた若武者里見義実が、安房に落ち延びる場面から始まります。やがて安房国滝田の城主になった義実は、隣国の館山城主安西景連（かげつら）の攻撃にあった。愛犬八房の働きによって敵将景連は打ち取ったが、その功績で八房は伏姫を連れて富山の洞窟に籠った。姫を取り戻しに来た許婚の金鏡大輔（かなまりだいすけ）は、鉄砲で八房を撃ち殺すが、伏姫にも傷を負わせてしまった。八房の気を感じて懐妊してしまっていた伏姫は、身の純潔を証する為、大輔と父義実が見守る中自害をしてしまった。この時、伏姫が幼い頃に役の行者から授かった護身の数珠から八つの玉が飛び散った。この玉が八方へ飛んで、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の霊珠を持つ八剣士が登場してくることになる。この後、金鏡大輔は出家して中大法師となり、飛び散った八つの玉の行方を旅に出る。伏姫の子供と言える八剣士たちは、それぞれ思いがけない所で出会い、華々しく活躍する。20年ぶりに里見義実のもとに連れ帰った八剣士は、義実の孫娘をそれぞれ娶る。その後子ども達は家督を譲るか、義実は富山山中で仙人になったというお話です。



## 八剣士と八玉の説明

・犬江親兵衛仁（いぬえしんべえ まさし）

仁・・・ 儒教の根本理念で自他の隔てをおかず、一切のものに親しみ情け深くあること。  
愛情を他に及ぼすこと。いつくしみ。思いやり。

・犬川荘助義任（いぬかわそうすけ よしとう）

義・・・ 道理。人間として行うべき筋道。  
利害をすて、条理に従って人の為に尽くすこと

・犬村大角礼儀（いぬむらだいかく まさのり）

礼・・・ 人の行うべき道。  
社会の秩序を保つ為の生活上の定まった形式。  
敬意をもって、きまりに従う事。うやまってお辞儀をすること。

・犬坂毛野胤智（いぬさかけの たねとも）

智・・・ 物事をよく理解し、わきまえていること。  
賢いこと。是非を判断する心の作用。知恵。

・犬山道節忠与（いぬやまどうせつ ただとも）

忠・・・ 真心を尽くして忠実なこと。まめやか。  
主君に対して、臣下としての真心を尽くすこと。

・犬飼現八信道（いぬかいげんぱち のぶみち）

信・・・ 欺かないこと。言をたがえぬこと。  
思い込んでうかがわないこと。信用すること。帰依すること。

・犬塚信乃成孝（いぬづかしの もちたか）

孝・・・ 父母に良く仕える事。父母を大切にすること。

・犬田小文吾悌順（いぬたこぶんど やすより）

悌・・・ よく兄又は長者（年長者など）につかえて柔順な事。  
弟又は長幼間の情誼の厚いこと。

## 里見氏の起こり

里見氏は贈鎮守府將軍・新田義重の庶長子・新田義俊（里見太郎）を初代とする。里見の名は新田義俊が上野国碓氷郡（八幡荘）里見郷（現在の群馬県高崎市上里見町・中里見町・下里見町）に移り、その他の名を苗字としたことに発する。

家系図を見ると、義俊は新田竹林六郎太郎との称していることから、新田壮内にも所領を以っており、里見氏の本拠を竹林（高林）郷とする研究もある。



## 鎌倉時代・室町時代

鎌倉時代になると、義俊の長子里見良成が源頼朝に使えて御家人となった。義成は頼朝に重用され、頼朝の死後も代々の將軍に近侍した。

鎌倉時代の末の里見義胤（義俊の6世の孫）は、本宗家の新田氏と共に倒幕軍に参加。新田義貞に随行し、鎌倉攻めに加わり功を挙げ、戦後越後国の守護代に任ぜられた。南北朝の動乱では南朝方に従っていたものの、宗家が没落すると一族の中に北朝方に参加するものが現れた。室町幕府に従って美濃国に所領を得た里見義宗もその一人です。義宗は観応の擾乱で足利直義に従ったが、直義は敗北して美濃里見氏は所領を失い、没落。その後、鎌倉公方足利満兼に召し出されて常陸国に所領を得た人物に、里見家兼がいる。家兼の子の里見家基は、足利持氏に奉公衆として仕えた。家基は、上野国・常陸国灘に所領を与えられていた。しかし永享の乱で家兼が自害、続いて結城の合戦で家基・家氏父子が討たれ、上野里見氏嫡流はここで断絶した。

家基のもう一人の子とされる義実（或いは家兼）を旧来の伝承による上野里見氏嫡流ではなく、美濃里見氏・義宗の末裔であったとする説が出されている。

室町時代以降、発祥地・上野国における里見氏は、里見義連（義胤の子）の三男である仁田山氏連の系統に属して、戦国時代に二階堂政行配下で仁田山城主であった里見家連（宗連）などが散見され、家連は後に上杉謙信の討伐を受けて戦死を遂げて、子の宗義（後に戦死）と義宗は碓氷郡里見郷に逃れて、榛名里見氏と称したという。また、家連の許には同族の縁を頼り、安房国を追われた安房里見氏一族の里見勝広という人物が身を寄せたと伝えられる。



## 安房里見氏

安房里見氏は、戦国時代に安房国を掌握、房総半島に勢力を拡大し、戦国大名化した氏族である。

「関東副師」もしくは「関東副將軍」と自称している。

安房里見氏初代・里見義実（或いは家兼）は、結城合戦で討死した里見家基の子息とされる人物で、安房国に移り安西氏を追放して領主となったとされる。（里見義実の安房入国伝説より）しかし、義実の出自や安房入国の経緯についての詳細は不明です。同時代の史料からの確認できないことから、安房里見氏の系譜上で初代とされる義実、2



盟を結ぶことにより切り抜け、上総に勢力を伸ばした。

里見義堯・義弘の親子は、永禄6年（1563年）及び永禄7年（1564年）の第二次国府台合戦で後北条氏に敗北をするが、永禄10年（1567年）の三船山合戦で後北条氏を破り、上総での勢力圏を確固たるものにした。後北条氏が上杉と連携すると、これに対抗して義弘は甲斐の武田氏と同盟を組み（甲房同盟という）着々と勢力を拡大した。下総南部にも影響を及ぼすようになり、最盛期を迎えた。



だが、天正2年（1574年）に義堯が没した頃より北条氏から撤退し、以後領国経営に専念する。義弘が天正6年（1578年）に没すると、嫡子梅王丸と弟義頼（義弘の庶子とも言われる）との間で家督争いが発生し、また上総国人の離反などにより一時家勢は衰えた。しかし家督争いを制して当主となった里見頼義は、豊臣秀吉に接近し、安房・上総全域と下総南部の安堵を得ることに成功する。家督争いに敗れた梅王丸は出家させられ、母と姉は田淵の琵琶首館に幽閉されたと言われています。

### 館山藩の成立と改易

義頼の跡を継いだ里見義康は、小田原征伐に参陣するも、惣無事令違反を犯した為秀吉の怒りを買った。これにより上総・下総は没収され、安房一国のみが安堵された。この時徳川家康がとりなしたことにより、以降里見氏は徳川氏とよしみを通じるようになった。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦い後、論功行賞によって常陸鹿島領3万石が加増され、館山藩は都合12万2千石の大名となった。また、義康の弟の里見忠重も上野板鼻1万石の藩主に任ぜられた。

しかし、慶長18年（1613年）に里見忠重が突如改易処分となり、翌慶長19年（1614年）には宗家の里見忠義も舅（しゅうと）である大久保忠隣に連座して安房を没収され、鹿島の代替え地として伯耆倉吉（はくぎくらよし）3万石に転封となった。しかし実際は、彼には100人扶持ほどの糧米しか与えられておらず、配流と同じ扱いだった。そして元和8年（1622年）、忠義が病死すると、後継ぎがないとして改易となった。



### 安房里見氏の末裔

実際には、忠義には正室に二人の女子が居たほか、側室に3人の男子が居たと言われている。忠義の子であるとされている里見利輝は、もと家臣の印東氏に育てられたという。子孫は越後鯖江藩主間部氏に仕えた。他の子の子孫を残しており、それぞれ150俵取りの下級旗本や他家に仕官をしたという。忠義の叔父である里見忠重（元板鼻藩）は改易後、酒井家に預けられ、子孫は出羽庄内藩の家臣として仕えた。また、里見義堯の五男に里見義政がおり、その五世の孫里見義冬が常陸水戸藩士となっている。昭和前期の実業家・社会教育家である里見純吉（大丸第2代社長・千葉県出身）も安房里見氏の一族である。その祖は江戸期に遠江掛川藩（太田氏）に仕えていたが、明治維新时期の藩主転封（上総松尾藩）によって房総に戻った。

## 市原市内における里見氏系の城址と関連遺跡

### 里見八犬伝のモデルとなった「里見種姫の墓所」

寺伝によると、館山城主で後の久留里城主の里見義堯公の長女の里見種姫は、大多喜城主正木大膳亮時茂の長男、正木大太郎に嫁いだが、永禄7年1月の第二次国府台合戦で敗れ25歳で戦死した。種姫は悲しみのあまり尼僧となり、永禄7年に朝生原の字坊山に七伽藍を備えた宝林寺を創建し、亡夫の冥福を祈ったという。開山となる初代住職には駿河国から壽陽大和尚を招いた。種姫は、天正17年（1589年）6月15日に48歳で病死をした。



寺の近くの山の中腹には、種姫が住んだという草庵と洞窟があったと言ひ、字天津前（尼津前の転訛か）の地名が残っている。

### 加茂・南総地区の城址

池和田城 所在地 市原市池和田字城廻

築城時期 戦国期

築城主 里見氏家臣の多賀越中守

概要説明 池和田城は平蔵川にかかる鶴見橋のすぐ北側にある比高25mほどの台地上にあった。

この台地は、北側の基部の方が切通しとなって、切り離されたおり、ここの所に城址の標柱が建っている



岩井戸城 所在地 市原市池和田字岩井戸

築城時期 戦国期

築城主 里見氏家臣の多賀越中守

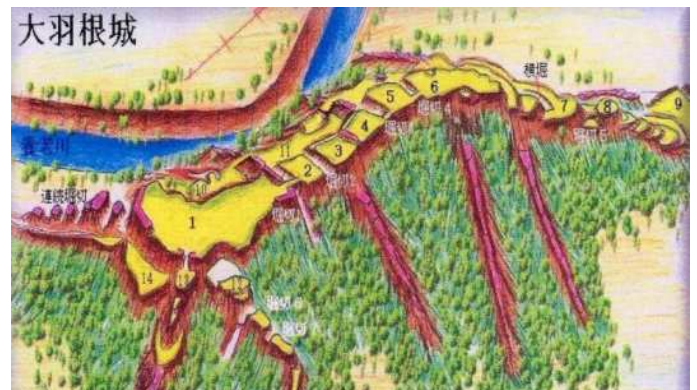
概要説明 岩井戸城は、池和田城の東南側の比高20mほどの西側に向かって長く伸びた山稜にあった。池和田城の出丸として築かれた城と思われ、物見台があったと言われる。

大羽根城 所在地 市原市本郷字大羽根

築城時期 天正年間（1573～1591）頃

築城主 里見氏

概要説明 大羽根城は音羽根城とも呼ばれ、歴史や城主は不明ですが、地元の伝承では千葉氏に備えて築いた城と言われている。城の規模や構造から、天正年間の里見氏の城として間違いない。大羽根城は高滝湖に注ぐ養老川のすぐ東側の比高60m程の台地上に築かれ、究極の要害地にあった。城は、基本的に細長い尾根を連郭式に区画した構造となっている。



琵琶首館（びわくびやかた） 所在地 市原市田淵字百尾  
 築城時期 室町時代 天正8年（1580年）  
 築城主 里見義頼

概要説明 琵琶首館は、里見義弘の子、梅王丸とその母と姉が幽閉された場所とされています。

琵琶首館は、かつては蛇行する養老川の断崖に囲まれた要害の地にあった。現在は西側の台地基部にトンネルを掘って流路を直進させたので川の流れは変わっている。

この台地は比高10m程で、三方が断崖であり、西側の台地基部はがれ岩盤が剥き出しとなっており、城館を築くには最適な場所となっている。この台地基部には、かつて里見梅王丸の菩提を弔うため建立された満蔵寺があったと言われる。

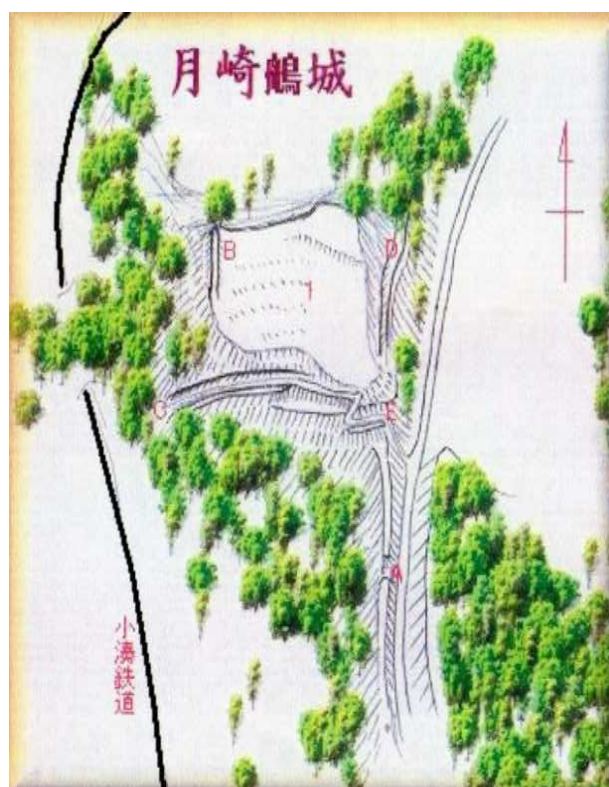
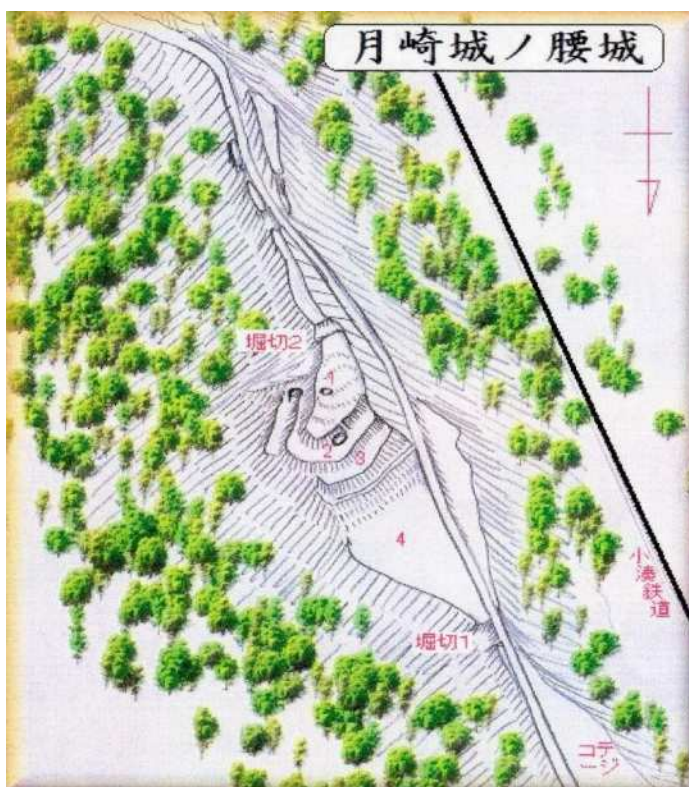


### 月崎城の腰城・月崎鵜城（みさごじょう）

所在地 市原市月崎及び字みさご台  
 築城時期 室町時代後期 天正時代と思われる  
 築城主 里見義頼

概要説明 月崎城の腰城は、鵜城と共に琵琶首館の背後にある城址で、共に琵琶首館の詰め城、あるいは監視所として築かれたという。腰城は、琵琶首館の300m程西側にある。郭や土塁・空堀などが残っている。その先500m程の北側にみさご城がある。

みさご城は城と言っても1郭を中心とした単郭構造で、1郭が割合広く長袖で100m近くあるが、削平されていなく傾斜地となっている。



## 姉崎地区

椎津城・正法山砦 所在地 市原市椎津字城山・要害台・五霊台

築城時期 元応から元徳年間（1325年頃と応仁年間（1467年頃）と明応年間（1492年頃）の3説がある。

築城主 椎名胤仲（椎名三郎）と三浦定勝・房総武田氏の三説がある。

概要説明 椎津城はいずれにしても、康正2年（1456年）に甲斐武田氏の一族、武田信長（真里谷城主の祖）が上総に上陸し、上総一体に勢力を拡大し、椎津も武田氏の勢力下になったと言われる。南北朝時代に三浦定勝により築かれたのが最初と言われ、その後、千葉氏、武田氏と城主が変わり、幾度か戦場の場となっている。天文21年の戦いでは、天文20年11月4日、下総への進出を図る里見義堯・義弘は、正木氏・土岐氏を先鋒にして、椎津城に攻め寄せた。城主真里谷信政は北条氏の援軍を得て、城外に押し出して決戦に臨んだが大敗し、城内に戻り自刃したという。

